2022/6/16-2
（オマケの英語教室 touch out）書庫版

野球の本場、アメリカ人に
Your behavior is not good. It`s out of manner. Touch out level, I think.
（君の態度、よくないよ。マナー違反だ。(野球でいうところの)「タッチアウト」レベルだと思うぜ）
と言えばスムースに通じて笑ってもくれますが、
例えば当店の外国人従業員（ネパール人）にいっても通じませんし笑いも取れません。
ネックになったのが”touch out“という単語です。
それというのも、ネパールには国民レベルでの野球に対する認知が殆どないからです。
なので、話者が相手にジョークとして気付いて欲しい
「攻撃側選手がホームに滑り込んだ瞬間、審判が右上から左下にかけて電光石火、袈裟懸けに振下すアウトのポーズ」
等彼等には想像しようがなく
「なんでここに touch out なんていう単語が出てくるんだ？」
という「？」しか生じさせないからです。
結果ジョークの考え損。
この様に使う英語が正しいか否かの前に例え正しくてもその英語を使って相手に通じるか否かの問題がある事を知りました。
つまり
「まず前提をチェックするステップを設ける必要がありそうだ」
と。
We should put (or set) the step for checking to our common fields (or preset), maybe.
我々日本人はともすると
「日本の常識は世界のどこでも通じるものだ」いや「日本と世界各国津々浦々で違いがあるという事さえ考えたこともない場合が多い」

ので
「これから自分がする日本の常識に基づいた話は世界でも（日本人以外の聴き手にも同じ様に）通じるのか？」
という相手との共通基盤や共通認識に対する事前チェックをしない事により生まれる行き違いが生じやすい傾向にあります。
だとすれば我が国国民の多くが英語を話せるようになるにはまずこの
「島国鎖国」
「井の中の蛙大海を知らず」の
「裸の王様」状態に
「実は長年立っていたのだ」
という「気づき」が何よりも喫緊の課題の様な気がしないでもありません。
誠に失礼な言い回しですが。
叩かれることを覚悟のうえで申し上げましたが、それはさておき
思うに、
中学一年で何の説明もなくいきなり this is a pen 又は I have a pen と外国語（英語）を始める前に
「これから習う英語は日本語同様コミュニケーションをとる道具です。
日本人には日本語が通じるから日本語で話しますが、外国人には英語が一番通じやすいので英語で話す事になります。
しかし英語は一つではなく国の数だけ英語があります。アメリカで通じる英語とネパールで通じる英語は違います。文法や約束事が違うのではありませんから心配はいりません。
ただ、その国の歴史や文化、生活環境によって通じる言葉があったりなかったり、同じ単語でもすごく心に響いたり国によってはそうでもなかったりします。
世界は日本の中の様に皆同じではなくて皆それぞれ違うのです。でも違うからのけ者にするのではなく、違うから相手に配慮したり、違うものを面白いと感じたりすることが大切です。
英語の学習を通してそれを学んでいきましょう」
まずは先生である大人がそうなる必要があるのかもしれません。